

Barrio de tango, luna y misterio . . .

タンゴの街……月と神秘

Diciembre 25, 2009

N.N. Estudio Ebisu

峰 万里恵 (うた)

高場 将美 (ギター)

第1部

1. ブエノスアイレス

詞：マヌエル・ロメーロ

曲：マヌエル・ホベース

Buenos Aires (Manuel Romero – Manuel Jovés)

1923年のサイネーテ（スペイン起源の、オペレッタの1種といえるジャンル）『パリのぬかるみの中で』の劇中歌のひとつだそうです。序奏という感じの（歌詞のない）演奏部分が付いています。作詞はこの劇の作者、作曲者はスペイン人のピアニスト・音楽監督で、ブエノスアイレスとバルセローナの両方で劇場音楽で大活躍していました。

ブエノスアイレス、ラプラタ河の女王、わたしの愛する土地。わたしの歌を聴いておくれ、そこにはわたしの命がこもっている。

熱にうかされ乱れる酒宴のつづく時間、快樂と狂乱にもう飽ききったわたしは、祖国よ、おまえのことを思う、わたしの苦悩をやわらげるために。

ブエノスアイレスの夜、おまえのマントの下を、幸せと涙がびったり並んで行く。笑い声とキス、どこまでもつづくパーティ——すべてが、シャンパンで忘れられる。

ミロンガの出口で、パンを買うお金を求める女の声が聞こえる。タンゴの中ではいつでも悩みがすすり泣いているのには、それだけの理由があるのだ。

バンドネオンの、嘆くようなリズムに乗って、男が情婦をくどいている。ヴァイオリンの泣き声が、土地っ子の魂を描いてゆく。

ブエノスアイレス、好きなひとに対するように、おまえが遠くにいれば、それだけ愛した方がいい。そして一生告げるのだ——おまえを忘れる前に、死んだ方がいい、と。

2. エンビーディア（うらやみ）

詞：ホセ・ゴンサーレス・カスティージョ／アントーニオ・ボッタ／セサル・アマドーリ 曲：フランシスコ・カナロ／ルイス・リッカーディ（?）

Envidia (José González Castillo / Antonio Botta / César Amadori – Francisco Canaro / ¿Luis Riccardi?)

1935～36年に上演された、カナロ制作・総指揮の音楽劇『タンゴの祖国』の挿入歌のひとつです。当時のカナロ楽団の陰の音楽監督だったピアニストのリッカーディが、この曲を全面的につくったと推察されます。もちろん

ん、カナロの指示のもとに。作詞者に3人もの名前が登録されていますが、彼らは劇の脚本家たちです。

エンビーディアは「羨望」などと訳されますが、もう少し複雑な感情のようで、人をうらやんで嫉妬し、恨んだりする気持ちが含まれ……日本語の1語には訳せませんね。

エンビーディアを感じるのには悩んでいる人、全人生がただの夢だと知りながら待っている人。卑怯者、死んでゆく人、人を殺す人、傷つける人——彼らは許されることがないから。

わたしは正直者に生まれた。誇り高い頭を一度も下げたことはない。友にも敵にも手をさしのべた。そしてきょう、わたしの過去の冷酷な鏡に写る、変わり果てたわたしの姿、エンビーディアのせいだ。

わたしは嫉妬ゆえにエンビーディアを感じる、あなたのそばで愛されている幸せな人を見て。眠れない夜の、敗北者のエンビーディア。愛ゆえのエンビーディアほど大きな痛みはない。

3. マレーナ

詞：オメーロ・マンシ

曲：ルーシオ・デマール

Malena (Homero Manzi / Lucio Demare)

詩人マンシが著作権協会の仕事でラテンアメリカ各国に出張した帰りがけに、ブラジルのリオでナイトクラブに行き、偶然アルゼンチンの女性タンゴ歌手（ほとんど無名のアーティストです）マレーナ・トレードを聴きました。そこでインスピレーションを受けて一気にこの歌詞を書きました。ピアニスト・楽団リーダーである作曲者は、ブエノスアイレスでこの歌詞をもらい、喫茶店で、やはり一気に書き上げたそうです。1942年発表。

マレーナはタンゴをうたう、だれにもうたえないタンゴを、すべてのことばに心を込めて。マレーナはバンドネオンの悩みをもっている。たぶん、遠い子ども時代に、彼女のヒバリの声は、路地裏の暗いひびきを持ったのだろう。それとも、そのひびきは、彼女がアルコールで悲しくなったときだけ口にする、あのロマンスの名残りか……。

マレーナは影の声でタンゴをうたう。

あなたの歌には、最後の出会いの冷たさがある。あなたの歌は、思い出の塩の中であがくなる。わたしは知らない、あなたの声は悩みの花なのかどうか。ただ知っているのは、あなたのタンゴのつぶやきが聞こえると、あなたの大きな心を感じるということ、わたしよりもずっと大きな心……。

あなたの両目は忘却のように黒く、あなたの唇は固く結ばれた恨みそのもの。あなたの両手は寒がっ

ている2羽の鳩。あなたの血管にはバンドネオンの血が流れている。あなたのタンゴは、路地のぬかみみを横切ってゆく、見捨てられた赤ん坊たち。すべての扉は閉ざされ、歌の亡霊たちが吠えている。

マレーナは割れた声でタンゴをうたう。マレーナはバンドネオンの悩みをもっている。

4. 瓦屋根の古い大きな家 (ワルツ)

詞・曲:カトゥロ・カスティージョ
曲:セバ스티アーン・ピアーナ

Caserón de tejas (vals) (Cátulo Castillo – Sebastián Piana)

この曲の、最初の歌詞1句と音楽モチーフをカスティージョが作り、彼の先生でもあったピアニスト・作曲家ピアーナに渡しました。ピアーナは、それを発展させて全曲を作曲し、その後、音楽に導かれて歌詞が完成しました。

ベルグラノー地区はブエノスアイレスの北部。今世紀の初めは、まだ田園の面影が濃い、大きなヨーロッパ風のお屋敷が点在する土地でした。

ベルグラノー区……瓦屋根の古い大きな家……覚えていませんか、お姉さん、歩道の上での数々のあたたかい午後のこと？……そのとき近くを通る汽車が、わたしたちのところに置いていった、古い追憶の数々——あのバラの木の、しとやかな姿の下に……。

ベルグラノー区……瓦屋根の古い大きな家……アルヒーベ（水くみ場）はどこに行った？ あなたの中庭たちはどこに？ 格子窓はどこに行った？ あなたはピアノに帰ってくるでしょう、わたしの年とったお姉さん。そして数々のメロディの中に、あの日々が生きてゆくでしょう、わが家の晴れた日々が。

甘い昼寝の時間におじいさんが話してくれた、あのお話にあったように、暗いホールの小さなピアノがもどってくるだろう、あのワルツの純粋なやさしさを、血として流そうと……

ワルツがふたたび命をもった！ ピアノの眠り込んでいた声たちの中で、そして あなたの手のこまやかな魔術にひきよせられて、おじいさんのフロックコートが舞ってくるだろう……彼を呼んで……！ わたしたちは 遠いお話を生きましょう。だって あのベルグラノーの古い大きな家で——閉ざされた神秘を打ち破って——ママが私たちを呼んでいる……！

5. ダンサ・マリーグナ（邪悪な舞踏）

詞：クラウディオ・フロロ
曲：フェルナンド・ランドレ

Danza maligna

(Claudio Frollo – Fernando Landre)

作曲者は、タンゴ以外のダンス・リズムで人気があったキャバレのピアニストです。作詞者は定年までブエノスアイレスの裁判所判事でした。本名アトウェル・オカントスで、フォルクローレラテンアメリカの作詞もしています。この曲は1929年発表。

やくざっぽいビートが身を引きずっていく。縮んで、また伸びるタンゴのビート。その痛ましい音楽はまるで、なにかの脅威が迫ってくる感じだ。

ふたりでこの15分間を生きよう、ノスタルジックで邪悪な舞踏の15分間。ふたつの心臓の鼓動を聴こう、ヴィーナスの女神の霊のもとで。

やくざっぽいビートが身を引きずっていく、あなたの全身を所有するタンゴのビート。あなたのカールした髪の毛が、わたしのこめかみを撫でるのが、わたしの臨終の終油の秘蹟。

わたしはあなたをお誘いする、この愛のすべてが浄化される神殿に入ろうと。ふたりでこの15分間を生きよう、ノスタルジックで邪悪な舞踏の15分間。

神々の快樂、倒錯のダンス。タンゴは儀式、そして宗教。オルケスタがその祭壇、司祭はバンドネオン。わたしは自分の痛みの牢獄に捕えられたい。黙っていなさい、わたしの魂の片割れよ。ふたりのあいだには、秘密がひとつあるのだから。

6. カンタンド（歌いながら）

詞・曲：メルセデス・シモーネ

Cantando (Mercedes Simone)

女性歌手シモーネは、彼女にしかつくりえない独創的な作品をいくつか発表しています。後には他のアーティストも、ごく稀ですが男性歌手までも、彼女の曲を歌っています。

この曲（1931年）は、まるで彼女自身のことを歌っているように、人々が思いこみ、感動しました。完全に実話だったら、人を感動させる創作はできないのですが。

わたしはもう、あなたのキスの甘い味を失い、ひとりぼっち、愛もなく世界をさまよう。ほかの幸せなくちびるが、わたしの愛情のすべてだったあのキスの、今は持ち主になっているだろう。

わたしには自分がどうなっているのか、わからない時がある。笑いたくなり、泣きたくなり、嫉妬し、あなたが帰ってこないことが恐ろしくなる。わたしは愛している。わたしにはどうしても止められない。

奇跡の処女マリア様、お許しください。わたしの中で生きているこの歌で、わたしはお願いします。わたしのものを持ってきてくださいと。あんなにすぐに、訳もなくわたしが失ってしまったものを。

この人生でこれほど愛することが罪ならば、わたしはひざまずいて許しを乞います。わたしはこんなに愛している、あなたの愛と触れ合わなかったら死んでしまうほどに。

歌いながら、わたしはあの人に上げた、わたしの心を、わたしの愛を。そして、あの人が行ってしまったから、わたしは痛みを歌う。

歌いながらあの人に出会った。歌いながらあの人を失った。わたしは泣くすべを知らないから、歌いながら死んでゆこう。

第2部

1. トウクマンの夜 (サンバ)

曲：アタウワルパ・コパンキ

～ 赤い猫 (ガト) 作曲：ディーアス兄弟

Noches de Tucumán (zamba)

(Atahualpa Yupanqui) – El Pintao (gato)
(Hermanos Díaz)

ギターだけでおとどけます。

かつて、現在のペルーの首都リマは、スペインの南アメリカ支配の中心でした。そこで200年ほど前に生まれた舞曲形式《サマクエーカ》は、スペインからの流れに先住民やアフリカ人の感覚がミックスした独自の音楽性を持ち、男女のカップルがスカーフを振りながら踊る求愛のダンスです。現在でもポピュラーで、ペルーでは《マリネーラ》、チリとボリビアでは《クエーカ》の名前で愛されつづけています。アルゼンチンでは、より軽快なスタイルが《クエーカ》、より優雅なスタイルが《サンバ》として、それぞれ別のステップ構成の定型をもって、さかんに踊られ、歌われています。

もうひとつの《ガト》(猫という意味)は、アルゼンチン独自のフォークダンスで、軽妙で、ユーモラスな味のある、やはり人気のある踊りです。——ここでの曲は、サンティアゴ州のディアス兄弟(バンドネオンとギター)が作りしました。彼らはプロの演奏活動はまったくしませんでした。大地に根を生やして音楽を採集し、産み出していた兄弟です。

2. ラ・ペレグリナシオン (ウエジャ)

詞：フェリクス・ルーナ 曲：アリエール・ラミーレス

La Peregrinación (huella)

(Félix Luna – Ariel Ramírez)

作曲者はフォルクローレラテンアメリカのピアニストで、種々の企画の音楽リーダー、作詞者はジャーナリスト。有名なサンバ『アルフォンシーナと海』の創作コンビです。この曲はパンパ大草原のリズム《ウエジャ》に乗って、イエスをおなかに宿したマリアとヨセフがさまよっています。1964年の『わたしたちのクリスマス』という組曲のなかのひとつです。

人の踏んだあとをたどって、ヨゼフとマリア、凍りついた大草原を、アザミとイラクサの中を。野を横切って、休みどころも宿もない。歩きつづけなさい、おふたり。

野の小さな花、クラベル・デル・アイレ。だれもあなたを泊めてくれないのに、あなたはどこで生まれるのか？ あなたは大きくなっているというのに、おびえた小鳩、夢を見ることができないコオロギ。

人の踏んだあとをたどって、遠くからの旅人たち。小屋をひとつお貸しく下さい、わたしの男の子のために。いくつもの月、いくつもの太陽、アーモンドの小さな両目、オリーブの実の肌。

野のロバさん、こげ茶色の牛。わたしの男の子がもうやってくる、場所を空けておくれ。よしず屋根の小屋、それだけがわたしを守ってくれる。ふたり

の友だちの域と、澄んだ月。

人の踏んだあとをたどって、ヨゼフとマリア。隠れた神様ひとり連れて……だれも知らなかった。

3. チキリン・デ・バチン (ワルツ)

詞：オラシオ・フェレル 曲：アストル・ピアソラ

Chiquilín de Bachín (vals) (Horacio Ferrer – Astor Piazzolla) tikirin

Ferrer – Astor Piazzolla) tikirin

チキリン少年は実在、グリル焼き料理店バチンも実在。でも内容は、現代ブエノスアイレスの寓話です。1968年に、ほとんど「同棲」していた作者コンビが、緊密な相互理解のなかで創った、タンゴの世界をもったワルツです。

夜になると、ブルージーンの小天使の汚れ顔、バチンの店のテーブルをまわってバラの花を売り歩く。月がグリルの上に輝けば、彼は月と、煤(すす)のパンを食べる。

毎朝、夜明けを迎えたくない彼の悲しみの中で、子どもたちがプレゼントをもらう1月6日の朝、裏返しの星が彼をたたき起こす。3匹の賢者の猫たちが、贈り物が入るはずの彼の靴を盗んでいく。片方は左足の靴。もう片っぽも同じ。

太陽が子どもたちにお勉強に行くエプロンを着せるとき、彼はこれから、どれだけのゼロを知らないなければいけないか学ぶ。そして母親を見る。グルグルまわっている。でも見たくない。

日が射しはじめるころいつも、ゴミ箱で、パンひとつとつスパゲッティ1本で、彼は風を作り上げる。乗って飛んでいくために。でも、ここに居つづける彼は不思議な人間、千才の子ども。彼の中ではひもがこんがらかっている。

チキリン、おまえの呼び声の花束をおくれ、そうしてわたしも売りに出る、わたしの花咲く恥ずかしさを。3輪のバラを弾丸にして、わたしを撃つてくれ。おまえの空腹を理解できなかったわたしの、おまえへの借りが痛むように。チキリン……

4. 花咲くオレンジの木

詞：オメーロ・エスポーシト

曲：ビルヒーリオ・エスポーシト

Naranja en flor

(Homero y Virgilio Expósito)

作者兄弟は、非常に若い思春期にこの曲をつくっていたようですが、発表は1944年です。当時の最先端の現代感覚をもったタンゴ。そして今日でも、その新鮮さは失われていません。

やわらかかった、やわらかい水よりも……。川よりもみずみずしかった。花ざかりのオレンジの木。そして、その夏の通り、失われた通りに、人生のひとかけらを残した。そして行ってしまった。

あのひとに、わたしの両手は何をしたのか？

わたしの胸に、これほどの痛みを残すほどの何をしてしまったのか？……。老いた木立の痛み、街角の歌、人生のひとかけらとともに……。花ざかりのオレンジの木。

人は最初に、悩むことを知らなくてはいけない。その後、愛する、その後、別れてゆく、そして最後は考えもなく歩きまわること……。花ざかりのオレンジの薫り。ひとつの愛の、むなしいいくつかの約束、それらは風のなかに逃げていった……。その後——その後、何の意味がある？ わたしの全人生は「きのう」なのに。永遠につづく、老いた青春、それがわたしを、なにもできない弱い者にしてしまった、光をなくした小鳥のように……。

5. タンゴの街

詞：オメーロ・マンシ
曲：アニーバル・トロイロ

Barrio de tango

(Homero Manzi – Aníbal Troilo)

『スール（南）』の作者コンビが、おなじ風景をうたった、いわば『スール』の原点といえる曲（1942年）。作詞と作曲の緊密な共同作業でつくられています。

ひとかけらの街が、ブエノスアイレスの南のあたり、土手のわきで眠りこんでいる。踏切の棒でゆらゆら揺れているランプ、そして汽車が撒きちらしてゆく「さようなら」の神秘の種。

月に向かって、犬たちが声を合わせて吠える。玄関の軒下に隠されたあの愛、そして沼で小太鼓を鳴らしている、やかましい蛙たち。そして遠くに、あのバンドネオンの声。

あちらの街角では口笛のコーラス、酒場いっばいに広がるカード・ゲーム。もう二度と汽車を見に出てこなかった、あの青白い女性の、ひとつの痛み。ぬかるみの水をピチャピチャはねかす月。そして遠くに、あのバンドネオンの声。

もうなにも思い出せない古い友達、みんなどこへ行ってしまったのか？ わたしがあんなに愛していた金髪のアナは、知っているだろうか？ 彼女を捨てたあの午後から、私が彼女を思っているしんでいることを。

タンゴの街——月と神秘。思い出のなかから、わたしはふたたびおまえを見ている。

アマール・イ・カジャール

(愛は人に告げないで)

詞：ネリー・オマール 曲：ホセ・カネー

Amar y callar (Nelly Omar – José Canet)

女性歌手と、彼女の音楽監督役だったギタリストの合作です。ご要望がありましたので、皆様とごいっしょに歌うことにいたしました。リフレーンの部分をうたってください。

ロス・パーセス（魚たち）

スペイン伝承クリスマス・ソング

Los peces (Tradicional)

フラメンコの土地、スペイン、アンダルシア地方の民謡ですが、ラテンアメリカ各地でもポピュラーだそうです。

聖処女は髪をとかして、カーテンとカーテンのあいだで。髪の毛は金、櫛は高貴な銀でできている。

聖処女は洗ってる、それからローメロの木に乾してる。小鳥たちは歌ってる。ローメロの木に花が咲く。

聖処女の清らかな衣の胸明きには、バラの花。それは聖ヨセフがくれたもの、クリスマスイヴに。

飲んで、飲んで、川の魚たち。なんとよく飲む。神様が生まれたのを見て。

*ローメロ（英語ローズマリー）は、スペインでいちばんよく使われるハーブのひとつですが、「巡礼の木」という意味です。マリア様たちのさすらいのとき、道案内をした木だと伝えられています。

みなさまよいお年を！

またお会いできるのを楽しみにしています。

選曲・構成：峰 万里恵
プログラム製作：高場 将美